



「周りに流されることなく自分のやりたいことはどんどんやりたい」と、ボランティア活動への参加や語学を学んで世界で活躍できる人間になることを目標とする井口太志さん●1年

「自分の感性を大切に、周りの人を支えたり幸せを共有したいです」と、友達を大切に、将来は専業主婦になることに憧れるという田畑睦美さん●1年

森谷 男はあまり喋らず、不言実行、そういう方がカッコいいかな……とか。女性と一緒に掛ける時も男が決めてリードするのが男らしいかなと思います。僕は長男なので「家を継ぐ」と考えることは男だからですよね。そんなときは男らしさを意識している自分を感じるときがあります。でも、僕はガソリンスタンドでアルバイトをしているのですが、仕事上での男女差はあまり感じませんよ。

井口 小さいころは、よく「男の子は泣いちゃいけない」とか言われましたし、アルバイト先でも力仕事は男の仕事と決まっています。自分は、そのことをあまり重圧とは感じてこなかったですね。

Q 「男らしさ」や「男だから」といういわゆる「男らしさのバリア」を感じることがありますか？

インターネットや携帯電話のメールが「会話」と言われるITの世代の若者は、家族関係や男と女のあり方、家庭での役割などをどのように考えているのでしょうか。静岡県立大学国際関係学部4人の学生に話を聞きました。

Q

皆さんお母様が家事を担っていらっしゃるようですが、そのことをどう受け止めていますか。

●振り返って考えてみると、2人とも「バリア」を感じたことがあっても、日々の中ではあまり意識していないようですね。

森谷 父は家のことはやりませんでした。自分は母を手伝っていました。風呂掃除とか炊飯、皿洗いなど、自分が家庭をもつても結婚相手と半分半分であるべく手伝いたいと思っています。現在も自炊をしていますし、そんなに苦にはならないと思いますよ。

田畑 私は母の大変さを父に気づいてほしくて、中学生のころから自分でお皿を洗ったり、「今日は私がお風呂を洗うから、明日はお父さんが洗ってよ」とか「犬が散歩に行きたがってるよ、お父さん」とわざと台所に立ったり、父が動くように声をかけたりして母の家事の量を減らそうとしました。

加藤 両親は理解し合っていたので、父が家事に手をほとんど出さなかったことも、それほど問題はないと思います。でも、私は結婚相手と同じように仕事をしたいし、家事は夫婦で半分ずつで、それぞれができることを相談して分担したいです。

井口 家事をするなら、分担を決めちゃった方がいいですね。「できるだけ」だと皆、多分やらないと思います。

MOVING
県立大学生
Interview

Q

どんな家庭にしていきたいですか

森谷 残業して疲れて帰ってきた父を見ると、父親として家族を養っていくってこういうことかな、自分もこうなるのかなと想像することがあります。就きたい職業とか自分なりの目標がないわけではないのですが、どちらかと言えば、仕事は生きていくための収入源というように考えます。

加藤 仕事にしばられて生きるのではなく、家族との時間を大切にしたい生き方をしたい。パートナーとの関係を第一に考えます。

井口 正直言って家族を養っていくことを意識はしますが、一人で背負うより、当たり前だけど相手と一緒に家庭をつくっていくのがいいと思います。

田畑 意識としては対等でいたいと思います。相手とできるだけ時間を合わせて話をしたいですね。私の親は共働きのため、家族全員で夕食をするとすると夜十時ごろになってしまいます。でも、そこで今日あったことなどを話すと家庭と学校がつながっているような気がして、私にとって大切な時間でした。ですから、それぞれ各人で生活時間は異なっていますが、家族全員での時間の共有を大切にしたいと感じます。パートナーが家族でアウトドアに出かけたりすることに楽しさを感じているのなら、共有したいですね。

●取材の中で加藤さんは、「仕事人間だった父が、最近家族のことや、いろいろなことで悩んでいる様子が伺えます。『頑張ってる』はストレスになるので、『大丈夫だよ。私たちはちゃんとやっているよ』と伝えたいです」と話してくれました。会話に乏しいと言われている若者たち

ちですが、「性差」をこえた「自分らしさ」を大切にしたい生き方をめざし、家庭でのコミュニケーションも大切に考えているようです。若者たちが望む生き方を実現させるためにも「男女共同参画」の、より一層の広がりが期待されます。

家庭でのコミュニケーションを大事にしたいです



「常に自分と向き合って自問自答しながらこれから進むべき方向を選び取っていききたいです」。あらゆる情報や人のかかわりの中で、考えを広げて前向きに生きたいと話す加藤里依子さん ● 3年



「いつも元気で笑いが多く、かつ優しくありたいですね。目標は常に前向きに」と、ドラマ『北の国から』の家族像に憧れるという森谷直将さん ● 1年



このページに登場した4人は、平成13年11月24日に静岡県女性総合センターあざれあのフラッシュポイントカレッジとして行ったフォーラムの「未来に向かって若者たちの選択 恋愛・結婚とは」の企画・運営に参画した大学生です。

20年

ねっとわあくタイムカプセル

今からちょうど20年前、21世紀の婦人の生活を予測しようとする「婦人の将来像」に関する県内有識者百人への意識調査が行われました。当時21世紀初頭を念頭にした男女に関わる未来予測ですが、果たして当たっていたのでしょうか。また、この調査結果と合わせて8人の男女に「聞いてみました婦人の将来像」という特集が本誌創刊2号に掲載されました。

アンケート調査では、「働く女性が増加している」―「そう思う89%」、「職場での男女平等が進む」―「そう思わない77%」との回答でしたが、この予測は的中しています。これに反して、「家事、育児を分担する夫が増えている」については、「そう思う78%」との回答でしたが、夫の家事育児参加は、あまり進んでいないといえませんが（平成13年度意識調査参照）。また「聞いてみました婦人の将来像」の方では、社会参加、職場、家庭、福祉制度など、どの分野も「今日、お聞きした」といつても良いほど、20年経過したいまもほとんど変わっていないのが現実です。当時の編集員に、この特集を作った当手を振り返ってもらいました。

（創刊2号は図書室で借りることができます。）

私が「ねっとわあく」の編集員になったのは、20年前の一九八二年。この年は、「国連婦人の10年」の中間年を過ぎ、行政の取り組みは婦人問題の解決をめざして婦人の地位の向上や社会参加の



『ねっとわあく』
創刊号・第2号担当編集員
和田 紀子さん

場の提供が主で、県では婦人対策室が担当していました。当時は、結婚したら家庭に入り子育て中は家事に専念するのが当たり前の社会でした。女性が働こうとするとき、採用される段階から差別がありました。また、仕事でそれまで男性が担当していた分野などで能力を発揮すると男性はもちろん、横並びに補助的仕事に慣らされていた同性の女性からも白い目で見られる、そんな時代でした。

この20年で一番大きく変わったことは、男女雇用機会均等法や育児・介護休業法など雇用の場での機会は均等になり、それだけでも女性が働きやすくなったと思います。また、特に近年企業の評価が能力主義に変わりつつあることは、女性にとって大きなチャンスといえます。

これからは、女性にとって翔ける時代だと思います。しかし、女性達が就労や地域活動をとおして、共同参画の意識へと変わってきているのに、男性の意識が20年間ほとんど変わっていないのは淋しい限りです。私は、『ねっとわあく』で多くの人との出会い、そして学んだことがあったから、自立して今でも仕事を続けていられるのだと思います。その私の懸命に働く姿を見て育った息子は、働く女性への理解や意識をしっかりと持って育ってくれました。これは私の喜びです。



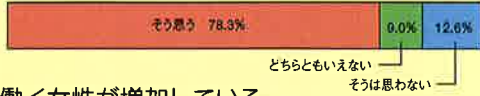
18年間続いた
小杉思主世さんの手による表紙デザイン

21世紀の現実

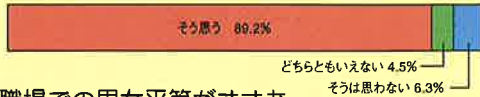
1982年

「婦人の将来像」に関する調査

Q.1 家事・育児を分担する夫が増えている。



Q.2 働く女性が増加している。



Q.3 職場での男女平等がすすむ。



働く女性が増加しているが
職場での男女平等が進んでいない

●1982年

国連総会「国際平和と協力促進への
婦人の参加に関する宣言」を採択

●2001～2002年の出来事

2001年7月24日

静岡県男女共同参画推進条例

2001年10月13日

配偶者からの暴力防止及び
被害者の保護に関する法律

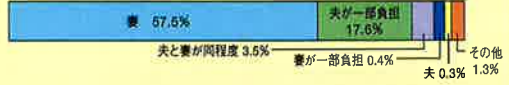
2002年4月1日

育児・介護休業法改正

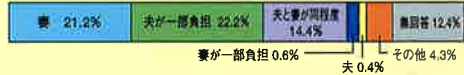
2002年

男女共同参画に関する県民意識調査

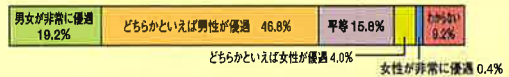
Q.1 主に掃除・洗濯・食事の支度などの家事をするのは誰ですか。



Q.2 主に育児・子どものしつけをするのは誰ですか。



Q.3 職場で男女は平等になっているとお考えになりますか。



郵便はがき

4228063

50円切手
をお貼り
ください。

静岡市馬淵1丁目17-1
静岡県女性総合センター
『ねっとわあく』編集係行

※差し支えなければ
御記入ください。

(ふりがな) _____ 町 番 号
お名前 _____ 市区 丁目
ご住所 〒 _____ 都道 府県
TEL _____ FAX _____

読者アンケートにご協力ください
点線で切り取り、切手を貼って送ってください。
ご意見・ご感想も、お待ちしております。

編集後記

「メンズリブ」。このような運動があること、男性に生きていく上での悩みがあるなどと思っていませんでした。解らない部分と締め切り日とのプレッシャーの中で書き上げました。これからは、ねっとわあくレポーターの経験を地域の活動に生かしていきたいと思います。

浜北市 岩下 智子

映画「リトルダンサー」を見ました。“男だったら”ボクシングと言っていた父親もバレエに打ちこむ息子を応援するようになります。“男だから”という枠にはめてしまうと可能性を奪うこともあります。自分や自分のまわりの人をいろいろな枠にはめて見ていませんか。額ぶちを外して、「絵」そのものを見る。この40号をきっかけにしてほしいと思います。

静岡市 田中 貴子

『男女共同参画』という深遠なテーマと向き合った2年間。「家族」が家族である意味と個人の自立への追求との間で、悩んだこともありました。子育て中心の生活から少しは視野が広がったかな。性別・世代・人種などの様々な違いを認め合い、分かり合っている未来を子供たちに見せてあげたいですね。

静岡市 前田純代

何度も企画を練り直す辛い日々。一步外に飛び出して、少しだけ触れることができた人情・温もりが感じられる落語の世界。「笑われてもいい」——白鳥正己さんの一言は、“らしさ”に縛られている男性だけではなく、私にとっても心地良いものでした。

静岡市 久保田 さきの

正月早々「手」を骨折した。核家族で転勤族の我が家。どうなる事かと思いきや、子どもたちは「喧嘩しないで自分で何でもやろうね」と話し合っている。親が必要以上に「手」をやかない方が家族としてのリスクや役割に気づくのかもしれないと思感。ふむ、これが怪我の巧みってやつかしら。

静岡市 塚越 直子

「ねっとわあく」は県民から公募したレポーターが、企画編集しています。

編集アドバイザー 大國 田鶴子さん

発行 平成14年3月

編集 静岡県生活・文化部男女共同参画室
静岡県女性総合センター

住所 〒422-8063 静岡市馬淵1丁目17-1
TEL054-250-8107
FAX054-255-9266

『ねっとわあく』は年2回発行(3月、10月)
県行政センター、県内女性センター、市役所、
公立図書館、公民館、文化会館、総合病院
などで配布しています。

R100

静岡県生活・文化部男女共同参画室